

梁末における庾信

森野繁夫

庾信の生涯は梁朝の滅亡によって大きく変化した。それまではその優れた文才によって皇太子蕭綱の愛顧を受け順調に官途を歩んでいたが、後半生は梁の滅亡によって、祖国を滅ぼした北朝（西魏・周）に仕えざるを得なくなった。北朝における二十六年間の庾信の生活は、恥辱と望郷の思いにおおわれた日々であつたとされている。

しかし北朝における彼の作品を読んでいると、その恥辱と望郷の思いの奥に、もうひとつ何かが隠されているように感じられる。それは何なのか、其の詩賦を読みながら考えてゆくことにしているが、その前に祖国滅亡までの数年間における彼の行動について調べておく必要がある。そこで此の度は、侯景の亂から江陵陥落までの経緯と、其の間の庾信の行動を見ていくことから始める。

侯景が太清二年（五四八）八月に反亂を起こしてから、太清三年の建康陥落、更に承聖三年（五五四）の西魏の侵攻による江陵陥落に至る六年間は、次のように推移す

る。

- ・太清二年（五四八）八月、侯景反す。庾信35歳。同年十月、侯景の軍は建康に迫る。簡文帝蕭綱（時に太子）は信に命じ、宮中の文武千餘人を率ゐて朱雀航を守らせる。景の至るに及び、信は衆を以て先に退く。
- ・三年（五四九）三月、侯景は宮城を陥す。
- ・五月、武帝没し、簡文帝即位。庾肩吾を度支尚書と為す。庾信は建康を脱け出て江陵に向かう。
- ・簡文帝 大寶元年（五五〇）、庾信は逃亡生活を続けている。
- ・大寶二年（五五二）十月、侯景は簡文帝を弑す。庾信は、都から巴陵、更に郢州を経て、此の年の中頃、すなわち建康が陥落して二年半後に湘東王蕭繹の拠る江陵に辿り着き、父肩吾に会う。間もなく肩吾卒す。庾信は御史中丞となる。
- ・承聖元年（五五三）三月、王僧辯、陳霸先ら、侯景を討伐し、亂は平定。
- ・四月、益州刺史武陵王蕭紀、蜀で帝位に即く。

十一月、蕭繹 江陵で即位（元帝）。庾信は右衛將軍に転じ、武康県侯に封ぜられる。

・承聖二年（五五三）五月、蜀に拠った武陵王紀は元帝に攻められて敗死。

・承聖三年（五五四）、庾信42歳。

七月、帝は散騎常侍庾信らを西魏に使せしむ。

十一月、西魏の大軍に攻められて江陵は陥落。元帝は執えられ、十二月に殺される。

庾信はそのまま西魏に抑留される。

この数年間の事情を庾信の行動を中心に、次のような順序でもう少し詳しく見ていくことにする。

一、侯景の亂

1 建康の戦い—宮城陥落

2 庾信は江陵へ逃れる

二、元帝（湘東王蕭繹）即位

1 西魏への使者

2 江陵陥落—長安拘留

一、侯景の亂

梁・武帝の太清元年（五四七）、東魏の司徒であった侯景が、豫・廣・潁・洛等、河南の十三州を以て内属を求めてきた。武帝は侯景の帰順を許し、大將軍、河南王に封じた。

侯景が内属を求めてきたのは、東魏において危険人物として誅殺されそうになったためであった。しかし翌二年二月、武帝はその東魏と連和してしまい、身の危険を感じた侯景は梁に対して異志を懐くようになった。合肥を守っていた播陽王蕭範や司州刺史羊鴉仁が侯景に異志の有ることを朝廷に伝えてきたが、領軍將軍の朱异はそれを無視して奏聞しなかった。

一方、侯景の方は、臨賀王蕭正徳（武帝蕭衍の異母弟）が帝位継承のことで朝廷を怨んでいることを知り、密かに内応の約束を結んで八月に寿春に反した。そうして合肥、歴陽、京口と軍を進めて十月には都に迫った。それに対して朝廷は、揚州刺史宣城王蕭大器（簡文帝の長子）を都督城内諸軍事とし、南浦侯蕭推（武帝の弟 安成王蕭秀の子）に東府城（建康の南）を、西豊侯蕭大春（簡文帝の第六子）に石頭城（建康の西）を、そうして輕車長史謝禧に白下（建康の北）を守らせた。

1 建康の戦い—陥落

やがて建康に迫った侯景の軍は、蕭正徳が密かに遣わした船で江を渡り朱雀航に向かった。都の南にある丹陽郡に駐屯していた正徳の軍がそれに合流した。時に庾信は建康の令であり、太子の命令で朱雀航の守備についていたが、侯景の軍が迫ってくると一戦も交えることなく撤退している。その時の様子について『梁書』侯景伝に

は次のように記している。

・建康の令 庾信は兵千餘人を率ゐて航北に屯す。景の航に至るを見て、航ふなばしを徹せんことを命ず。始め一船を除くも遂に軍を棄てて南塘に走る。遊軍復た航を閉ざして景を渡す。皇太子は乗る所の馬を以て王質に授け、精兵三千を配して、庾信を援けしむ。質は領軍府に至りて、賊と遇ひ、未だ陣せずして便ち奔走す。景は勝に乗じて闕下に至る。

建康令庾信率兵千餘人屯航北。見景至航、命徹航。始除一船遂棄軍走南塘。遊軍復閉航渡景。皇太子以所乘馬授王質、配精兵三千、使援庾信。質至領軍府、與賊遇、未陣便奔走。景乘勝至闕下。

『周書』庾信傳、及び『南史』侯景傳には、此の時の様子が次のように記されている。

・侯景 亂を作すや、梁の簡文帝は信に命じて宮中の文武千餘人を率ゐて、朱雀航に營せしむ。景の至るに及び、信は衆を以て先に退く。

侯景作亂、梁簡文帝命信率宮中文武千餘人、營於朱雀航。及景至、信以衆先退。〔『周書』庾信傳〕

・建康の令 庾信、兵千餘人を率ゐて航北に屯す。景の至るに及び航を徹す。始め一船を除くに、賊軍皆な鐵面を著くるを見、遂に軍を棄てて走る。南塘の遊軍復た航を閉ざして景を度す。

建康令庾信、率兵千餘人屯航北。及景至徹航、始除一船、見賊軍皆著鐵面、遂棄軍走。南塘遊軍復閉航度景。〔『南史』

侯景傳)

朱雀航は秦淮河に渡した船橋で、その北にある朱雀門を通つて行くと宮城の正門である宣陽門に至る。首都防衛の重要拠点であり、敵にここを突破されると宮城まで一気に攻め込まれてしまう。太子の信任厚かつた建康令庾信は、この重要な場所の守りを任されていたのであった。にもかかわらず庾信は、侯景軍の勢いに圧倒されて戦うことなく撤退している。

なお『梁書』臨賀王蕭正德傳によれば、景の江に至るに及び、正徳は潜かに空舫を運らし、詐りて荻を迎ふと稱し、以て景を濟わたす。朝廷未だ其の謀りごとを知らず、猶ほ正徳を遣して朱雀航を守らしむ。景の至るや、正徳は乃ち軍を引きて景と俱に進む。

及景至江、正徳潜運空舫、詐稱迎荻、以濟景焉。朝廷未知其謀、猶遣正徳守朱雀航。景至、正徳乃引軍與景俱進。

のように、朱雀航には別に朝廷から、侯景と手を結んでゐる蕭正徳が派遣されていたとあるが、朱雀航には皇太子蕭綱の命によつて庾信が守りについでゐるので、『梁書』蕭正徳傳の記述には間違いがあるのではなからうか。次に挙げる『資治通鑑』梁紀一七では、蕭正徳は宮城の正門である宣陽門を守つていたことになっている。

侯景が正徳の内応によつて建康城に侵入し、更に宮城に迫つてくる様子については、『資治通鑑』梁紀一七に次のようにまとめて記されている。

・侯景 朱雀桁の南に至る。太子は臨賀王正徳を以て宣

陽門を守らしめ、東宮学士 新野の庾信をして朱雀門を守り、宮中の文武三千餘人を帥めて桁の北を衛らしむ。太子は信に命じて大桁を開きて以て其の鋒を挫かしめんとす。正徳曰く「百姓 桁を開くを見れば、必ず大いに驚駭せん。且く物の情を安んず可し」と。太子之に従ふ。

俄かにして景至る。信は衆を帥めて桁を開く。始めて一船を除くも、景の軍 皆な鐵面を著くるを見、退きて（朱雀）門に隠る。信は方に甘蔗を食ふ。飛箭有りて門柱に中り、信は甘蔗を手にするも、弦に應じて落し、遂に軍を棄てて走る。南塘の遊軍沈子睦は、臨賀王正徳の黨なり。復た桁を閉ぢて景を渡す。太子は王質をして精兵三千を將めて信を援けしむるも、領軍府に至りて、賊に遇ひ、未だ陳せずして走る。

正徳は衆を張侯橋に帥めて景を迎へ、馬上に揖を交す。既に宣陽門に入るや、闕を望みて拜し、歔歔して流涕す。景に随ひて淮を渡るや、景の軍は皆な青袍を著し、正徳の軍は並びに絳き袍を著し、碧の裏なり。既に景と合するや、悉く其の袍を反す。景は勝に乗じて闕下に至る。

侯景至朱雀桁南、太子以臨賀王正徳守宣陽門、東宮学士新野庾信守朱雀門、帥宮中文武三千餘人衛桁北。太子命信開大桁以挫其鋒。正徳曰「百姓見開桁、必大驚駭、可且安物情」太子從之。

俄而景至。信帥衆開桁、始除一船。見景軍皆著鐵面、退隱

于門。信方食甘蔗。有飛箭中門柱、信手甘蔗、應弦而落、遂棄軍走。南塘遊軍沈子睦、臨賀王正徳之黨也。復閉桁渡景。太子使王質將精兵三千援信、至領軍府、遇賊、未陳而走。

正徳帥衆於張侯橋迎景、馬上交揖。既入宣陽門、望闕而拜、歔歔流涕。隨景渡淮、景軍皆著青袍、正徳軍並著絳袍、碧裏。既與景合、悉反其袍。景乘勝至闕下。

侯景が反した太清二年（五四八）當時、庾信は東宮学士として建康令を領していた。その頃の様子を庾信は「哀江南賦」で次のように記している。

乃ち解懸して通籍し、遂に崇文にして武に會す。笠轂に居りて兵を掌り、蘭池に出でて典午たり。兵を江漢の君に論じ、圭を西河の主に拭ふ。

乃解懸而通籍、遂崇文而會武。居笠轂而掌兵、出蘭池而典午。論兵於江漢之君、拭圭於西河之主。

「宮門にある名札を外して自由に宮内に入りし、崇文觀に居ながらも武事に携わっていた。車笠の下に坐して兵を掌り、蘭池に出ては軍を指揮しており、江漢の君と兵を論じたり、西河（東魏）の主の許に使者として赴いたりした。」

時に庾信は東宮において文武の任を兼ねていた。『庾開府集』に付す滕王道の序によれば「又た東宮領直、春宮兵馬と為り、並びに節度を受く」とある。そうして其の軍事、とりわけ水戦の能力については、同じく滕王道の序に

「時に江路に賊有り。梁の先主は信をして湘東王（蕭繹。後の元帝）と中流水戦の事を論ぜしむ。醜徒 其の名徳を聞き、遂に即ち散奔す。深く梁主の賞する所と為る」とあるように、その兵法の知識は戦わずして敵を退散させるほどのものであったという。しかしながら実戦においては其の能力は全く發揮されることはなかった。

宮城は包圍されて五か月近く経った太清三年三月に陥ち、侯景は自ら都督中外諸軍事、大丞相、祿尚書と為り、各地から都に集まっていた諸王侯の三十餘萬の援軍は、不和のために為す術もなく退散してしまった。侯景は約束によって蕭正徳を天子とし、正平元年と改元していたが、宮城が陥落すると太清の号を復し、正徳を降して大司馬とした。やがて侯景を恨んだ正徳が不穩な動きを見せ始めたので、侯景は彼を殺してしまった。五月に武帝蕭衍は八十六歳で崩じ、侯景が全権を握っているなかで皇太子蕭綱（簡文帝）が即位した。

2 江陵へ逃れる

朱雀航で敗れて後の庾信の行動については、記録が無いのでよくわからない。『周書』本傳には、臺城の陥落するや、信は江陵に走る。梁の元帝 制を承くるや、御史中丞に除せらる。位に即くに及び、右衛將軍に転じ、武康侯に封ぜらる。

とあるだけで、詳しいことは書かれていない。

「哀江南賦」には、侯景によって建康が陥落し、武帝、簡文帝が害に遇ったことを述べた段の結びに、

鬼同曹社之謀、人有秦庭之哭。

「鬼は曹社の謀を同じくし、人に秦庭の哭有り」とあり、春秋の頃、呉に都を奪われた楚の申包胥が援軍を求めて秦に行き、七日七夜 聲を絶たなかった故事を踏まえ、庾信は建康を脱けだして、江陵の湘東王蕭繹ら諸王の許に救援を求めに向かったようなことが記されている。しかし實際は、庾信が江陵に拠る湘東王蕭繹（元帝）の所に辿り着いたのは大寶二年（五五二）の中頃のようにあるから、宮城陥落後二年餘りが経っている。途中、どのような事情があつたのかわからないが、これでは何の役にも立たない。

宮城陥落後二年餘りの間の庾信の行動については「哀江南賦」序に、

・粵 戊辰の年、建亥の月を以て、大盜國を移し、金陵 瓦解す。余は乃ち身を荒谷に竄し、公私塗炭す。

粵以戊辰之年、建亥之月、大盜移國、金陵瓦解。余乃竄身荒谷、公私塗炭。

と記されており、賦の方には其の逃亡の様子について、爾して乃ち壘を関塞に假り、使者と稱して酬對す。

鄂坂の譏嫌に逢ひ、彤門の征税に値ふ。

白馬に乗るも前まず、青騾に策つも轉た礙げらる。落葉の扁舟を吹き、長颿に上游に飄ふ。

爾乃假璽於関塞、稱使者之酬對。

逢鄂坂之讒嫌、值彰門之征稅。

乘白馬而不前、策青驪而轉礙。

吹落葉之扁舟、飄長颿於上游。

「私は天子の使者の名を借りて関所を通り、関所役人の受け答えをした。鄂坂では厳しく尋問され、彰門では通行税を徴収された。白馬に乗っても関所を抜けられず、青いラバに策打つても次々と邪魔をされた。落ち葉のような小舟に身を任せ、長風に吹かれて上流に漂っていった。」とある。これによれば庾信は朝廷の使者と偽って逃避行を続けていったようだ。その経路については「哀江南賦」に次のようにある。

帆を黄鶴の浦に落し、船を鸚鵡の洲に藏す。

路は已に湘漢に分れ、星は猶ほ斗牛に看る。

落帆黄鶴之浦、藏船鸚鵡之洲。

路已分於湘漢、星猶看於斗牛。

長江を遡って「黄鶴之浦・鸚鵡之洲」すなわち鄂州（武昌）を通り、「湘水・漢水」の地、すなわち岳州を過ぎ、江陵に向かっている。

続いて賦には、建康を脱出してから江陵に辿り着くまでの苦難が詠われている。

荆衡の杞梓を謂ひ、江漢の恃む可きを庶ふ。

淮海維揚より、三千餘里。

漂渚に過りて寄食し、蘆中に託して水を渡る。

七澤に屈し、十死に濱し。

謂荆衡之杞梓、庶江漢之可恃。淮海維揚、三千餘里。

過漂渚而寄食、託蘆中而渡水。屈於七澤、濱於十死。

「荆衡に在る杞梓（元帝）のことを思い、江漢の地の掘るべきを願いつつ。淮海揚州の地から、はるばると三千餘里。漂渚に立ち寄って寄食したり、蘆の中に身を潜めて江水を渡ったり、雲夢の七澤に身を屈めて、十死にも近い目に遭ってきた。」

なお『南史』梁宗室傳には、信が江陵に向かう途中に鄂州刺史蕭韶の許に滞在していた折りのことが記されている。蕭韶は長沙王蕭懿（文帝の長子で、武帝の兄）の孫であり、幼童の頃は庾信と親密な関係にあった。

韶昔幼童為りしとき、庾信は之を愛し、断袖の飲有り。衣食の資る所、皆な信の給する所なり。客を遇するに、韶は亦た信の為に酒を傳ふ。後に鄂州と為る。信の西して江陵に上るや、途に江夏を経る。韶は信に接すること甚だ薄し。青油の幕下に坐せしめ、信を引きて宴に入るや、信を別榻に坐せしめ、自ら矜る色有り。信稍て堪えられず、酒の酣なるに因りて、乃ち徑ちに韶の床に上り、蹋の肴饌を踐み、韶の面を直視して、曰く「官の今日の形容、大いに近の日に異なれり」と。時に賓客坐に満つれば、韶は甚だ慚耻す。

韶昔為幼童、庾信愛之、有断袖之飲。衣食所資、皆信所給。

遇客、韶亦為信傳酒。後為鄂州。信西上江陵、途經江夏。

韶接信甚薄。坐青油幕下、引信入宴。坐信別榻、有自矜色。

信稍不堪、因酒酣、乃徑上韶床、踐蹋肴饌、直視韶面、曰「官

今日形容大異近日「時賓客滿坐、韶甚慚耻。」

このように健康から江陵へは長く苦難の旅が続いたようであるが、それは時期的にも、もはや援軍を求めてのものとは考えられない。

庾信は宮城が陥落してから二年餘りの間、このように知人や友人を頼りながら、梁朝再興を湘東王蕭繹（武帝の第七子）に期待して、彼の拠る江陵に近づいていったのであろう。ただ二年餘りというのは少々長すぎるので、或いは其の間、各地に拠る諸王たちの情報を集めて、身を寄せるべき安全な場所を探していたことも考えられる。

二、元帝（湘東王蕭繹）即位

皇太子蕭綱（簡文帝）は大寶元年（五五〇）五月に即位した。庾信の父の肩吾はその度支尚書となり、侯景の命で、江州に拠って侯景に抵抗している當陽公大心に降伏勧告に向かったが、到着前に大心が侯景に降つたために途中で姿をくらまし、後に江陵に辿り着いている。八月に侯景は位を相國に進め、二十郡を封土として漢王となつた。そうして翌年の八月には簡文帝を廃して晉安王とし、豫章嗣王蕭棟（昭明太子蕭統の孫）に禪位させたうえで、十月に殺している。

江陵に拠つた湘東王蕭繹は、兵を挙げた湘州刺史河東王蕭譽（昭明太子蕭統の次子）、雍州刺史岳陽王蕭譽（譽

の弟）や、邵陵王蕭綸（武帝の第六子）、益州刺史武陵王蕭紀（武帝の第八子）らを鎮圧しながら、大寶三年（五五二）三月には王僧辯、陳霸先らの働きで侯景を討伐して殺した。そうして承聖元年（五五二）十一月、江陵で即位（元帝）した。

庾信が湘東王の許に辿り着いたのは即位の前年、大寶二年（五五一）の中頃であった。そこで父の肩吾と再会し、やがて御史中丞に除せられ、王が即位（元帝）すると右衛將軍に転じ、武康侯に封ぜられている。

1 西魏への使者

江陵で即位した元帝の課題は、國內に於ては各地に割拠している諸王の勢力を抑えることと、対外的には北齊（東魏は大寶元年（五五〇）に滅亡し、齊が建国）と西魏の侵攻を防ぐことであつた。時に北齊とは一応は國交があつたが、西魏とはそれは無かつた。

前者については、蜀に勢力を張っている武陵王蕭紀（武帝の第八子）、郢州の邵陵王蕭綸（武帝の第六子）があり、また岳陽王蕭譽、河東王蕭譽（いずれも昭明太子蕭統の子）らが、元帝に対抗していた。後者については、とりわけ南下の機会を窺っている西魏に対する備えが必要であつた。

元帝は諸王については次々と其の勢力を抑えていったが、西魏に対しては何故か危機感に乏しく、結局、即位

して三年目に江陵は西魏の攻撃によつて陥落する。西魏の侵攻を年を追つて見てみると、次のようである。

*承聖二年（五五三）正月、戊寅、西魏は大將尉遲迴を遣はして益州を襲ふ。八月、戊戌、尉遲迴益州を陥す。〔梁書〕元帝紀）西から江陵を制圧せんとしたのであろう。

*承聖三年（五五四）秋七月、梁の元帝は西魏に使（庾信）を遣し、舊圖に據りて以て疆界を定めんことを請ひ、又た齊と連結すといふ。太祖宇文泰は其の言辭を「悖慢なり」として「古人に言有り。『天の棄つる所、誰か能く之を興さん』と。其れ蕭繹の謂か」と言つて、全く相手にしなかつた。〔周書〕卷二、文帝紀下の恭帝元年）

*冬十月、柱國于謹、中山公護、大將軍楊忠、韋孝寬等を遣はし、歩騎五萬もて之（元帝）を討つ。（同上）

なお『資治通鑑』梁紀によれば、この年の三月に來聘した魏の宇文仁恕に元帝が「舊圖に拠りて疆界を定めんことを要求したることになつてゐる。すなわち、

承聖三年三月、己酉、魏の侍中宇文仁恕來聘す。會たまま齊

の使者も亦た江陵に至る。帝は仁恕に接して齊使に及ばず。仁恕歸り、以て太師（宇文）泰に告ぐ。「帝又た、舊圖に拠りて疆界を定めんことを請ひ、辭頗る不遜なり」と。

泰曰く「古人に言有り。『天の棄つる所、誰か能く之を興さん』と。其れ蕭繹の謂か」と。荊州刺史長孫儉は屢しばしばば攻

取の策を陳ぶ。泰は儉を徵して朝に入れ、問ふに經略を以てす。復た命じて鎮に還らしめ、密かに之が備へを為す。

馬伯符は密かに使して帝に告ぐも、帝は之を信ぜず。（馬伯符は太清三年に魏に降り、魏に留められていた）

四月、上散騎常侍庾信らをして、魏に聘せしむ。

*冬十月、丙寅、魏軍襄陽に至り、魏に與する岳陽王蕭警は衆を率ゐて之に會す。〔梁書〕元帝紀）

*十一月、辛亥、魏軍大いに攻む。世祖は枇杷門を出で、親ら陣に臨んで督戦す。六軍敗績し、城は西魏に陥つ。〔梁書〕元帝紀）

元帝は西魏との關係が次第に緊張を増していく承聖三年の七月（『周書』文帝紀による。『資治通鑑』は四月とする）に、散騎常侍庾信らを西魏に使者として派遣している。

使いの目的は、承聖三年（五五四）三月に魏の侍中宇文仁恕が來聘した時に元帝が要求したという「請拠舊圖定疆界」（舊圖に據りて以て疆界を定めんことを請ふ）と

いうことについての協議であつたろう。しかし宇文仁恕が帰国してそのことを泰に報告した時、宇文泰は「古人有言。『天之所棄、誰能興之』其蕭繹之謂乎」（『左氏傳』襄公二三年の語）と言つて、江陵攻略の準備を既に進めて

おり、今更、交渉の餘地は全く無かつたように思われる。

なお、『周書』文帝紀では、同年七月に元帝が使者を遣して「請據舊圖以定疆界。又連結於齊」（舊圖に據りて以て疆界を定めんことを請ふ。又た齊に連結すと）と

要求してきたことになっている。そうして宇文泰が「古人有言。『天之所棄、誰能興之』其蕭繹之謂乎」と言ったのは其の時のことになっている。おそらく承聖三年三月に魏の侍中宇文仁恕が來聘した時、元帝が「批舊圖定疆境」を要求し、七月になって庾信らを派遣して改めてそのことを申し入れたのであろう。「又連結於齊」とあるから、この要求については齊の意志でもあることを伝えて圧力を加えようとしている。それに対して宇文泰は「言辞悖慢なり」とし、「古人に言有り『天の棄つる所は、誰か能く之を興さん』と。其れ蕭繹の謂か」と言ったのであろう。

それがまとまることのない協議であることは、当時の西魏と梁の力関係、梁を奪わんとしている西魏の意図から考えて、誰が見ても明らかであった。「哀江南賦」には当時の梁の勢力範囲について「地は黒子ほくろ為り、城は猶ほ弾丸のごとし」と記されており、大國西魏に対して「舊圖に據りて以て疆界を定めんことを請ふ」などと対等の要求のできる状態ではなかった。更にこのとき西魏は使者に對する元帝の無礼な態度を怒っており、庾信自身も「哀江南賦」の中で次のように述べている。

周は含む 鄭の怒り、楚は結ぶ 秦の冤あやまみ。

南風の競はざる有り、西隣の責言に値あふ。

周含鄭怒、楚結秦冤。

有南風之不競、值西隣之責言。

元帝が河東王蕭譽を殺したために、譽の弟の岳陽王蕭譽

は西魏と結んで元帝を攻めた。「楚」は梁を、「秦」は西魏を指し、西魏の方は使者に對する元帝の態度に腹を立てていた。時に梁の軍備は不十分であったのに、更に西魏の責言を受けることになってしまったという。兩國の関係がこのような状態であったにもかかわらず、庾信は使者として西魏に向かったのであった。

妥結の可能性の無いことがわかっていながら、庾信はなぜ使者として西魏に赴いたのか。主君の命令であるから仕方がなかったのかもしれないが、それとは別に、行かざるを得なかった事情が庾信にはあったようである。それは「讒言を避ける」ためであり、或いは起死回生の使者としての出行は、讒言の内容が事実無根であることを証明するための行動であったのかもしれない。

その事についての記述は其の本伝などには見えないが、庾信の詩賦の中にそれとおぼしきことが詠われている。すなわち「擬詠懷」の二十一には次のような述懐がある。

倏忽市朝變

倏忽しゆくこつとして市朝は變じ

蒼茫人事非

蒼茫さうぼうとして人事は非なり

避讒猶采葛

讒を避けんとして猶なほも葛を采とり

忘情遂食薇

情を忘れて遂に薇を食ふ

懷愁正搖落

愁いひを懷いだきて正に搖落せんとし

中心愴有違

中心違いたふ有るを愴いたむ

獨憐生意盡

獨り憐れむ 生意の盡くるを

空驚槐樹衰

空しく驚く 槐樹の衰ふるを

「忽ちのうちに世は移り変わり、霞の彼方に全て消えてしまった。讒言を避けんとして、なおも『葛を採ろう』（交渉に当たろう）としたが、今ではその時の気持ちも忘れて遂に『薇を食らう』ことになった。愁いを懐きつつ今や揺落ちんとして、心の中の思いと行いとの違いを傷み悲しむ。槐樹の老木の衰えにただ驚いているばかり。」

「避讒猶采葛」の「采葛」は『詩經』王風の篇名で、小序には「『采葛』は讒を懼るるなり」とあり、毛傳には「一日 君を見ざれば、讒を憂懼す」という。「采葛」はこのように、使者として外に出ている間に讒言されることを憂懼する詩とされているが、庾信は「讒を避けんとして」と言っているので、『詩經』の詩にそのまま拠らなくてもよからう。

その時、庾信に対してどのような讒言が有ったのかわからない。考えられることといえは先ずは建康防衛の際の庾信の行動についてであろう。すなわち、侯景が建康に迫った時、庾信は皇太子の命を受け、宮中の文武千餘人を率いて朱雀航の北を固めたが、侯景の軍が現れると怖気づいて退却。この緒戦の敗退は首都防衛に大きな影響を及ぼしたに違いない。或いは庾信が戦わずして撤退したのは、侯景と手を結んでいた蕭正徳の一味であったためであろう、などという讒言が流されていたのかも知れない。

更にまた元帝の舊臣たちの反撥も考えられる。庾信は

それまで簡文帝の側近として重きをなしていたが、湘東王（元帝）に仕えたことはなかった。従って湘東王に長年仕えている者たちにとつては、建康から逃げてきた新参の庾信が高位に就くことは面白くなかったに違いない。

「哀江南賦」の、江陵に辿り着いて元帝に仕えていた時の様子を詠んだ箇所に、次のような句がある。

敬斜の小徑に入り、蓬と藿の荒れた扉に掩はる。

汀洲の杜若に就き、蘆葦の単衣を待つ。

入敬斜之小徑、掩蓬藿之荒扉。

就汀洲之杜若、待蘆葦之単衣。

おそらく讒言によつてであろう、曲がりくねった小徑に入り込んでしまい、「蓬藿の荒扉」に追い込まれたこと。すなわち主君の側から遠ざけられ、死罪になるおそれがある状態であったという。「就汀洲之杜若」は、『楚辞』九歌、湘夫人に「牽汀洲兮杜若、將以遺兮遠者」（汀洲に杜若を牽りて、將に以て遠き者に遺らんとす）を踏まえたもので、讒人のために放逐され、江潭を彷徨いながらも己の真心を理解してくれる人を求めていた楚の屈原に我が身をたとえている。また「待蘆葦之単衣」は、『呉志』諸葛恪傳によれば、恪が殺される前に「諸葛恪、蘆葦の単衣に篋の鈎落、何に於て相い求めん成子閣」という「童謡」が歌われていたが、果たして恪は「葦の席を以て其の身を裹まれ、篋で其の腰を束ねられて、成子

閣（建業の南にあった石子岡墓地）に投げ棄てられた」という。これらの句から、時に庾信は讒人のために帝の側から外されて、いつ死罪になるかもしれない状態にあったらしいことが推測されよう。

元帝は猜疑心が強く、性質は残忍であったから、このとき庾信には、事の成否は別として使者として朝廷を出る道しか残されていなかったのではなからうか。元帝の猜疑心の強さについては「哀江南賦」に、
猜ひを沈くしては則ち方に其の欲を逞しくし、
疾みを蔵しては則ち自ら己に矜る。

天下の事焉に没し、
諸侯の心揺れたり。

沈猜則方逞其欲、蔵疾則自矜於己。

天下之事没焉、諸侯之心揺矣。

とあり、『梁書』元帝紀の史臣の言葉にも、
性を稟くること猜忌にして、疏近を隔てず。
下を御するに術無く、氷を履むも懼れず。

稟性猜忌、不隔疏近。御下無術、履氷弗懼。

のようにある。残酷の性については、『資治通鑑』の「梁紀」二二に曰う。

帝は性残忍にして、且つ高祖が寛縦の弊に懲り、故に政を為すに嚴を尚ぶ。魏師城を困むに及び、獄中の死囚、且に数千人ならんとす。有司之を釈して以て戦士に充てんことを請ふ。帝は許さず、悉く之を梏

殺せしめんとす。事未だ成らずして城陥つ。

帝性残忍、且懲高祖寛縦之弊、故為政尚嚴。及魏師圍城、獄中死囚、且數千人。有司請釈之以充戦士。帝不許、悉令梏殺之。事未成而城陷。

と。庾信が「疏近を隔てざる」元帝の「猜忌の性」に怯えたのも当然のことであろう。

使者として西魏へ赴く庾信に成算はほとんど無かつたであろうが、「讒を避け」るためには使者として西魏に行かざるを得なかつた。とにかく起死回生の使者として梁の為になわぬまでも力を尽くそう、僅かな成果でもあればそれによって、「讒言」が謂われのないものであることを証することもできるのである。西魏に向かつた庾信の思いはそのようなものではなかつたかと推測される。

2 江陵陥落—長安拘留

三年十一月、江陵城は西魏の大軍による攻撃で陥落。元帝は執えられ、十二月に殺された。西魏は梁王蕭督（昭明太子蕭統の子）を立てて江陵に置き梁主とした。一方、齊の側では、齊に保護されていた貞陽侯蕭淵明（文帝の長子長沙王懿の子）を立てて梁主とし、王僧辯に受け入れを要請した。僧辯は仕方なくそれを受け、淵明は五月に建康で即位し、晋安王蕭方智（元帝の第九子）を皇太子とした。しかしそれに反対する陳霸先は九月に僧辯を

殺し、十月に蕭淵明を退位させて司徒、建安公とし、晋安王方智を立てて帝（敬帝）とした。

さて、承聖三年の七月に西魏に着いた庾信は交渉の席に着いて、既に述べたように「舊圖に據りて以て疆界を定めん」ことを請い。この要求は齊の意志でもあることを述べたのであろう。魏の宇文泰は其の「言辞が悖慢」であるとして、「古人言有り。『天の棄つる所、誰か能く之を興さん』とは、其れ蕭繹の謂か」と、全く相手にしなかった。

使者の責任が果たせなかったことについて、庾信は「哀江南賦」序に次のように記している。

日暮れて途遠し、人間何の世ぞ。將軍一たび去つて、大樹も飄零し、壯士還らず、寒風蕭瑟たり。荆壁もて柱を睨み、連城を受けんとして欺かれ、載書もて階を横ままにし、珠盤を捧ずるも定まらず。鍾儀は君子、入りて南冠の囚に就き、季孫は行人となり、西河の館に留守さる。申包胥の地に頓するや、之を砕くに首を以てし、蔡の威公は涙盡きて、之に加ふるに血を以てす。

日暮途遠、人間何世。將軍一去、大樹飄零、壯士不還、寒風蕭瑟。荆壁睨柱、受連城而見欺。載書横階、捧珠盤而不定。鍾儀君子、入就南冠之囚、季孫行人、留守西河之館。申包胥之頓地、碎之以首、蔡威公之淚盡、加之以血。

「日暮れて途遠しとか、人間の世界は一体どうなってい

るのか。將軍が去ってしまったて、大樹（梁朝）も衰え果て、壯士は行きて帰らず、寒風だけが寂しく吹き付ける。さて藺相如が楚の璧を持って柱を睨んだのは、連城との交換を欺かれたため。毛遂が盟約の書を載せて階段を駆け上ったが、同盟は結局定まらなかった。楚の鍾儀は君子、晋に囚われても南冠を着けていた。魯の季孫は使者となつて、晋の西河に拘留された。楚の申包胥は頭を地に着け、砕けんばかりに懇願した。蔡の威公は國の滅亡を嘆き、涙は尽きて血を流した。」

「壯士不還、寒風蕭瑟」とは、戦国時代、燕の太子丹の為に秦王を刺殺せんとした荆軻の故事を踏まえる。荆軻の歌に「風蕭々兮易水寒、壯士一去兮不復還」（風蕭々として易水寒し、壯士一たび去りて復た還らず）とある。庾信は自分を「壯士」に見立てているのであろう。「荆壁睨柱、受連城而見欺」は、戦国時代の趙の藺相如が、秦王の求めに応じて和氏の璧と十五城を交換するために秦に入り、秦王に約束を守る気持ちのないことを見抜いて、璧を取り返して趙に持ち帰った故事。しかし自分はそのままでできなかった。

「載書横階、捧珠盤而不定」は、戦国時代、趙の毛遂の故事。合従の約を結ぶために平原君に従つて楚に行つたが、楚王がなかなか決断しないのをみて刀を抜いて楚王に迫り、盟約を成立させた。「載書」は盟書。「珠盤」は盟約の誓いに使う牛馬の血を入れる器。しかし自分は梁の使者として西魏に行きながら、使命は果たせなかつ

た。

自分には、あの藺相如や毛遂のように、我が身を棄てて交渉を成立させることはできなかった。更にそれだけでなく、楚の鍾儀のように、晋に囚われても南冠を被り続けることも、楚の申包胥のように、秦に行つて頭を地に打ち付けて援軍を懇願することもできず、ただ祖国の滅亡を坐視しているだけであった。

それが難しい交渉であることは初めからわかっており、だからこそ藺相如や毛遂のような行動が必要であったが、自分にはそれができなかった。更に北斉に行つて申包胥のように援軍を頼むこともできなかった。庾信はそれらのことを深く悔やんでいる。

使者としての使命を果たすことができなかつたことについては、「率爾成詠」、「擬詠懷」其の二（全10句の後半）にも詠われている。

「率爾成詠」は、思い起こすままに詠じた作であるが、思い起こされる事はいつも、故國を滅ぼした嘗ての敵國の地に、主君の使者としての使命を果たせぬまま生きながらえている自分のことであつたと詠う。

率爾成詠 率爾として詠を成す

昔日謝安石 昔日 謝安石

求為淮海人 淮海の人と為らんことを求む

彷彿新亭岸 彷彿たり 新亭の岸

猶言洛水濱 猶ほ言ふ 洛水の濱

南冠今別楚 南冠 今や楚に別れ

荆玉遂遊秦 荆玉 遂に秦に遊ぶ

倘使如楊僕 倘使 楊僕の如くするとも

寧為關外人 寧ぞ關外の人と為らんや

「その昔 謝安は、淮海の人となることを求めていたが、思い出されるのは 新亭の岸でのこと、それでも猶「洛水の濱」のことを言った。私は「南冠」の思いを胸に今や楚に別れ、「荆玉」を持ったまま遂に秦に留まっている。かりにあの楊僕のようなことをしたとしても、どうして關外の人と為つてよかつたであろうか。」（楊僕は任地の函谷関が弘農に在るために自分が關外の民になるのを恥じ、上書して許され関を新安に徙した。）

「彷彿新亭岸、猶言洛水濱」「新亭」は、東晋の都建康の近くにあつた。東晋の簡文帝が崩ずると桓温は都に入り、新亭に軍を止めて威圧し、政權の移譲を求めた。そうして時に朝廷の中枢であつた謝安と王坦之を呼び寄せて殺そうとした。しかし謝安の落ち着いた対応に桓温も手出しができず、帝位を篡奪せんとする温の思いは果たせなかつた。「洛水の濱」とは晋朝を意味する。謝安は「新亭」におけるあのような危険な状態に置かれながらも、それでも猶お晋朝を守ろうとしたことをいう。しかし自分にはそのようなことが出来なかつたという慙愧の思いがこめられているようだ。

「荆玉遂遊秦」「荆玉」は、和氏の璧のこと。藺相如は十五城と交換するため璧を奉じて秦に入り、璧を騙し取る

うとする秦王のねらいを退けて無事に璧を持ち帰った。「遂遊秦」とは、自分は梁の使者として西魏にやってきたが、使命を果たすことなく北地に留まっていることを言う。

「擬詠懷」其の二（全10句の後半）の方では、次のように詠っている。

誰知志不就 誰か知らん志の就らずして

空有直如弦 空しく直きこと弦の如き有らんとは

洛陽蘇季子 洛陽の蘇季子

連衡遂不連 連衡遂に連ならず

既無六国印 既に六国の印無くして

翻思二頃田 翻つて二頃けいの田を思ふ

「志の果たされないままに空しく「弦の如く直き思い」を持ち続けることになろうとは、誰が考えたであろうか。洛陽の蘇秦、連衡の策は遂に成らなかつた。六国の相印を佩びることのできぬまま、これも故郷に二頃けいの田が有つたためかと思つている。」

使者としての任務が果たされず、その結果、江陵は魏の大軍に包囲され陥落してしまつたことを、庾信は何時までも忘れることができなかったようである。その時の魏、齊の勢力と、弱体化した梁の関係から考えて、庾信がどんなに頑張つたところで事態が変わるとも思えないが、庾信自身は使命を果たせなかつたことを慚愧の思いとともに詠じている。「率爾成詠」「擬詠懷」（其の二）ともに、西魏によつて「三年別館に囚とら」えられていた時の

思いを詠じたものであろう。

庾信が魏に赴いたのは、承聖三年（五五四）の七月であるが、魏は十月に大軍を南下させ、十一月には江陵を占領し元帝を殺した。庾信の方はそのまま魏に抑留されている。「哀江南賦」序には「三日都亭に哭し、三年別館に囚とらはる」とある。そうして抑留された翌々年に魏に仕えて使持節撫軍將軍、右金紫光祿大夫、大都督となり、後に車騎大將軍、儀同三司に進んでいる。しかしその年の十月に宇文泰が没し、十二月に魏の恭帝は位を宇文覚に譲つて周となる。庾信はそのまま周に仕え、臨清縣子に封ぜられ司水大夫に除せられた。四四歳の時のことであつた。

三、庾信の「恥辱」「望郷」の思いと「後ろめたさ」

梁末の数年間における庾信の動きは以上のようなものであつたが、それを踏まえながら、北朝における彼の詩賦に繰り返し詠われる「望郷」と「恥辱」の思いの内容について改めて考えてみるに、それはただ「望郷の思い」と「恥辱感」だけではなく、その奥には別の思い、すなわち「後ろめたさ」「慚愧」の念が隠されていたように思われる。その「望郷の思い」「恥辱感」と「後ろめたさ」がどのように関わっているのか。その前に、順序として庾信の「後ろめたさ」の情、「慚愧の念」について見ていく。

侯景の反乱から建康陥落、更に江陵陥落まで、その数年間における庾信の行動には、既に述べたように、わかりにくいこと、理解しにくいことが幾つかあった。すなわち、

① 侯景の建康侵攻に際して、首都防衛の要である朱雀桁の守備を任されながら、進攻してくる賊軍と一戦も交えずして退却したこと。

② 賊軍に制圧された建康を独り脱け出して江陵に向かったこと。臺城内には武帝、簡文帝、それに父親の庾肩吾も居たのに、彼は単身脱出している。江陵に抛る湘東王蕭繹（元帝）に救援を求めようとしてのことであつたとしても、建康を出てから江陵に辿り着くまで一年以上もかかっており、これでは救援要請とはならない。

③ 江陵が西魏軍に包囲される三カ月前、庾信は元帝の使者として、妥結の見込みの全く無い交渉のために西魏に行っている。

庾信がこれらの行動をとった理由の詳細はわからない。しかし主要な理由の一つとして、彼が何よりも自分の身の安全を考えて行動する人であつた、ということがあるのではなからうか。以上の三つの行動に共通する要素からそのように思われる。そうして身の安全だけを保とうとして行動したあとの思いは、後に残った多くの人々の悲惨な結末を知って身を責める「慚愧の念」と「後ろめたさ」であつたに違いない。

まず①について。「哀江南賦」をはじめ其の他の詩賦において、此の件について触れることは全くない。本人もその事については言いたくなかつたのである。おそろく庾信の胸のうちには「何故あのような無責任なことをしたのであるうか、あの撤退がきっかけで宮城は陥落し、武帝、太子蕭綱（簡文帝）は無念の最期を遂げ、建康の民も賊軍の残虐な行為の犠牲になつた。どれもこれも自分が戦わずして退却したことがきっかけになつている」という、「慚愧の念」「後ろめたさ」があつたに違いない。

②の建康脱出についても、逃亡中の苦難については「哀江南賦」に詳しく記されているが、なぜ独りだけ抜け出したのか、その理由についての説明は既に述べたように「哀江南賦」に「人に秦庭の哭有り」と、それらしいことがあるだけで、他にはどこにも記されていない。宮城に武帝、太子蕭綱、それに父親の庾肩吾を残して脱出したのであるから、そこにはそれだけの理由、すなわち諸王に援軍を求めためというようなことが有つたはずであるが、建康を出てから江陵に辿り着くまで一年以上もかかっているのでは決死の行動とも思えない。

或いは脱出当初の目的はそうであつたが、諸王侯の不仲など諸事情によって目的が果たせなかつたのかも知れない。しかし結果的に庾信のこの行動は、身を寄せるべき場所を探すだけのものとなつている。

これらこのことについても①の場合と同じように、本人としても弁解の仕様のないことで、詩賦にも詳しいことは記したくなかったのではなからうか。おそらく自分の行動に「慚愧の念」、「後ろめたさ」を感じていたことであろう。

③の西魏へ使者として出行したことについては、「讒を避け」てのことであると説明している。この場合は、使者として西魏へ行ったのが西魏の江陵侵攻の僅か三個月餘り前であったことから、庾信が危険の迫っている江陵を抜け出す目的で使者となったのではないかという、人々の疑惑を解くための弁解とも考えられる。しかし「讒を避け」るための使者というのでは、それは個人的な理由であるとして人々の納得が得られるとも思えない。自分が江陵を出たあとに江陵の官吏や民が西魏軍から受けた被害の大きさを思えば、庾信の「慚愧の念」「後ろめたさ」の程が推測される。

①②のように其の行動についての説明が無い場合と、③のように説明が有る場合があるが、どちらにしても「慚愧の念」「後ろめたさ」がその背後にあったことを示している。彼が「後ろめたさ」を感じるわけは、自分が常に身の安全を保つために行動してきたことで、祖国にも国民にも大きな犠牲を負わせる結果となったためであったらう。勿論すべて庾信に責任があるというわけではないが、もし自分が身を棄てて働いておれば少しは何とかなったのではなからうかという思いを、彼は断ち切る

ことができなかつたのではなからうか。そうしてこの「慚愧の念」「後ろめたさ」は、北地での後半生を通して庾信の心の傷として消えることはなかつたに違いない。

それでは「恥辱」「望郷」の思いに「後ろめたさ」「慚愧の念」がどのように関わっているのだろうか。

先ず「恥辱」の思いについて言えば、庾信としてはそれを強調することによって少しでも「後ろめたさ」の情を薄めたいという思いが、知らず知らずのうちに働いたのではなからうか。「恥辱」の思いを強調することによって、自分の中では「後ろめたさ」による罪悪感を薄め、暫くでもそのことを忘れようとする。また世間に対しては、「恥辱」による苦しい胸のうちを表出して梁末における無責任で身勝手な行動に対する批判を薄めようとしたのではないか。身の安全だけを考えて逃げ回り祖国のために何の働きもしなかつた私に今その付けが回ってきている、という思いを込めながらの「恥辱感」の表出ではなかつたかと思う。

北地での作品に色濃く流れている「望郷」の思いにも、その「後ろめたさ」は関わっている。江南に帰る人たちを見送りながら、自分は何時になったら帰ることができるのであるかと涙を流す。しかし庾信としては、仮に江南に帰ることを許されたとしても、その「後ろめたさ」の故に、素直には帰ることはできなかつたのではなから

うか。

祖国とその人々を守る立場にありながら其の務めを果たすことができず、西魏の侵攻によって祖国滅亡による悲惨な結果を招いてしまった。それは自分だけの責任ではないにしても、健康の戦い、江陵陥落の際における自分の行動を思えば、今更帰って郷里の人たちに合わせる顔がなかったに違いない。「哀江南賦」序に、

信 年始めて二毛、即ち喪亂に逢ひ、藐かに是れ流離し、暮齒に至る。燕譚のごとく遠く別れ、悲しみ自ら勝へず。楚老に相ひ逢ふも、泣くこと 將た何ぞ及ばん。

信年始二毛、即逢喪亂、藐是流離、至于暮齒。

燕譚遠別、悲不自勝。楚老相逢、泣將何及。

「私は白髪はくはつの混じる年頃としごころになつて、にわかにわかに喪亂そうらんに逢い、故郷こきやうを離れて流離りゅうりし、この老年らうねんになつてしまつた。『燕の歌』にあるように遠く別れ、悲しみに耐えられない。楚の老翁らうおうに遇つても、泣いてはもらえないであらう。」とあるのは、その思いを述べたものであらう。

「楚老」とは、龔勝を弔つた楚の父老。龔勝は漢末の楚人で光禄大夫であつた。王莽に召されたが二主に仕えずとして断り、自ら餓死した。その死後、楚の父老が弔問に訪れ、これを哭して甚だ哀しんだという。「生きながらえて、祖国を滅ぼした北朝の主君に仕えた私は、故国の父老に遇つても龔勝のように泣いてもらえないのだ」と言う。たとえ帰ることを許されても、どんなに帰りたくても帰ることはできない、という思いが、庾信の

「望郷」の表白の奥にあつたのではなからうか。それは帰ることが許されないことによる「望郷」の思いよりも、更に辛く悲しいことであつたらう。

庾信は「哀江南賦」の序に、江陵陥落後の身の上について「三年 別館に囚はる」と記しているように、江陵に対する攻撃が始まつた承聖三年（五五四）十月頃から翌々年の頃まで、足かけ三年にわたつて抑留生活を送つていた。その間、江陵が陥落して長安に連行されてきた梁の王褒、王克、殷不害らは、早い時期に西魏の要請を受け容れて高位高官に就いたが、庾信だけは宇文泰からの出仕の要請を拒み通していた。身の安全を第一に考へていたそれまでの庾信であれば、他の舊梁臣たちと同じように早々と西魏に仕えるはずであるのに、この度は違つていた。

おそらくそれは、それまでの自分の行為についての「慙愧の念」「後ろめたさ」によるものであつたらう。ここで祖国を滅ぼした敵國に仕えたなら自分は完全に忘恩の徒になつてしまふ、という思いに苛まれていたのではなからうか。残された道は政治から身を引いての隠棲しか無かつたが、南朝とは異なつて隠棲ということが一般的でない北朝ではそれもかなわず、またいつまでも拒否を続けていると不慮の事態も予想される相手であつてみれば、出仕拒否の抵抗にも限界があつたのであらう。三年目の秋頃に帰順して使持節、撫軍將軍、右金紫光禄大夫、

大都督を受け、尋いで車騎大將軍、儀同三司に進められている。

庾信に「王琳に寄」せた詩がある。王琳は元帝に仕えていた將軍であるが、江陵陥落の後も北齊や北周の援助を受けながら、梁朝再興のために陳に抵抗を續けていた。

玉関道路遠　玉関道路遠く

金陵信使疏　金陵信使疏まじなり

獨下千行淚　獨り下す千行の淚

開君萬里書　君が萬里の書を開く

王琳からの「萬里」の便りを読みながら流す庾信の「千行の淚」は、梁末から西魏出仕まで、結局は身の安全だけを求めてきた自分と違って、今なお梁朝再興のために戦い續けている王琳を思つての「慚愧の念」「後ろめたさ」によるものであつたろう。

これらの問題については、庾信の全ての詩賦を読んだうえで改めて報告することにして、先ずは中間報告とする。